

『江戸名所図会』の深川

江東区深川江戸資料館

1. 江戸地誌の名著『江戸名所図会』

庶民の名所巡りがさかんとなった江戸後期は、江戸とその周辺の名所や旧跡、寺院・神社を紹介する地誌類が数多く出版されました。

そのひとつに『江戸名所図会』があります。神田雉子町の名主を務めていた斉藤幸雄・幸孝・幸成（号・月岑）の3代で天保7年（1836）に完成させました。豊富で精密な挿し絵は、長谷川雪旦が描いています。

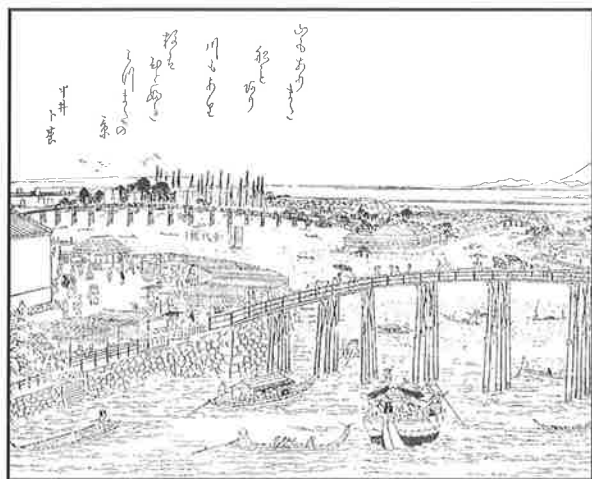
本号ではその中から、深川についての記述の一部を紹介しましょう。

2. 新大橋・三派

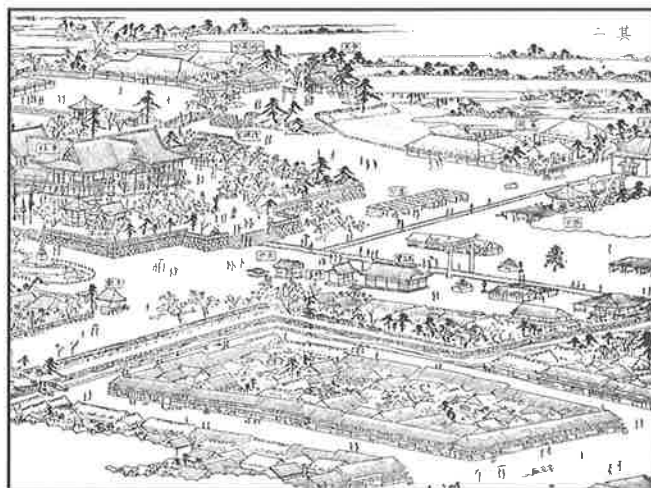
新大橋上流から新大橋・永代橋・隅田川を分ける中洲・江戸湾を描いています。当時は永代橋付近が隅田川の河口で、海が迫っていました。

中洲の箱崎・霊岸島・新堀町（中央区）周辺や対岸の深川佐賀町は問屋や白壁の土蔵が立ち並ぶ流通の拠点でもありました。永代橋の下流には上方から荷を運んできた大型船でしょうか、帆柱が何本も見えます。

新大橋の際には葦簀を張った水茶屋が並んでいます（絵左方、深川寄り）。



新大橋三派



富岡八幡宮

3. 富岡八幡宮・永代寺・深川三十三間堂

江戸湾を望む富岡八幡宮は、隣接する別当寺の永代寺、八幡宮東にあった深川三十三間堂とともに深川の代表的な名所です。

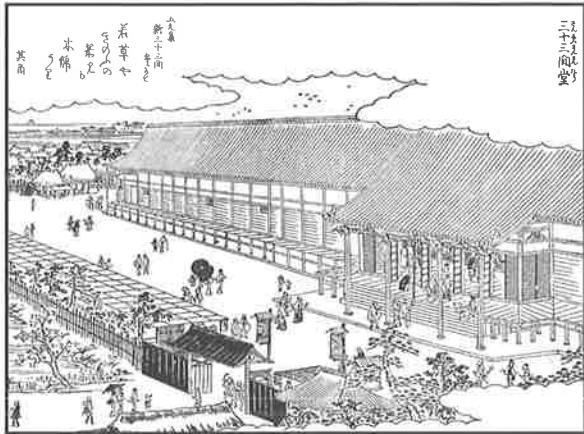
寛永4年（1627）開拓途上の永代島といわれた現在地に創建された八幡宮は、今の門前仲町交差点付近に一の鳥居があり、参道の両側は料理屋・水茶屋が並び、南方には辰巳花町がひかえていました。繁華な町並みに加えて、江戸前の新鮮な魚介類が人気の一つともなり、今もさかんな大祭や富士塚、勧進相撲の開催が人を集めました。

深川公園にあった永代寺は、八幡宮を管理する大寺院で、境内は季節の花が咲き乱れ、毎年3月21日から28日まで「山開き」と称して一般に公開されていました。明治になって神仏分離により廃寺となりましたが、塔頭の吉祥院が明治29年（1896）に名を継いで現在に至っています。

旧地にある深川不動堂は、明治11年（1878）の創建ですが、これは江戸時代から八幡宮で成田山新勝寺の出開帳が行われていたことによる縁で建てられました。

三十三間堂は、江戸初期に京都蓮華王院を模して浅草で開かれました。しかし元禄11年（1698）の火災で全焼し、深川に移転してきたのです。

大規模な建物と荘厳な仏像群、さらに弓術稽古のメッカとなって江戸から多くの人を訪れました。



深川三十三間堂

4. 洲崎弁財天社

深川の海岸に面した洲崎弁才天（現洲崎神社 木場6-13）は、富岡八幡宮から海岸伝いに東へと歩いたところがあり、その北側には木場の掘割りが碁盤の目状に広がっていました。

ここには高級料亭の升屋がありました。狂歌や戯作で有名な太田南畝や山東京伝等が入り出て繁盛しましたが、寛政3年（1791）の天津波で廃業となりました。

眼前の江戸湾は、遠く高輪・品川から房総方面まで望むことができ、正月の初日の出や春の潮干狩りなど、年中行事を楽しむ人々で混みあいました。

洲崎弁財天の東側は大名の下屋敷が続き、その先には砂村元八幡宮があります。現在の富岡八幡宮で、『図会』では「洲崎弁財天より十八丁余り東の海浜にあり。深川八幡宮の旧地なりといへり」と記されています。深川の富岡八幡宮の神体があったといわれ、砂村の総鎮守となっています。

このあたりはすでに近郊農村で、田畑が広がるのどかな光景が展開していました。

「十八丁」といえば約2キロ。海岸伝いの桜並木を觀に、足を伸ばした人も多かったようです。

5. 深川木場

江戸の材木需要を賄う木場も『図会』に描かれ

ています。縦横に開かれた掘割りに浮かぶ筏や、地面に上げられて高積みされた材木、そこで働く川並衆のイナセな姿は、江戸市中では見られない光景だったのでしょう。

現在の木場公園とその周辺にあった木場は、元禄14年（1701）に誕生しました。本所深川が開発され、この周辺が開拓されて隅田川近くにあった木場（元木場といい、現永代・佐賀・福住周辺）がこの地に移されて来たのです。

当初は、日本橋や神田周辺の材木問屋の貯木場で、本店は深川には少なかったのですが、開発が進み、新大橋・永代橋などの架橋もあって、江戸市中との距離が縮まったため、江戸後期には本店も増加しました。

5. 深川の名所

深川の名所の特徴は、やはり海と掘割りによって作られる景観です。人口密度の高い江戸の中心地に住む人々からみれば、開放感のある風景と映ったのではないのでしょうか。

また隣接して亀戸・大島・砂村などの田園地帯があったこと、そして、そのような場所に寺社の大伽藍が高くそびえていたことも、独特の景観を形成する要因でした。

さらに江戸湾（江戸前）や河川で捕れる魚介類を活かした料理が味わえるところも魅力となったのでしょう。



深川木場